りょうかわ

学校だより　令和3年6月4日発行　第5号　新潟市立両川小学校

差別や偏見を超えて

校長　　中村　雅芳

９６．２％，９８．２％‥この数字は，令和２年度の新潟市立小学校，中学校における特別支援学級の設置率です。もはや，ほぼ全ての小中学校に特別支援学級が設置され，全市で２０６１名（前年比＋１７６名）の在籍児童生徒が学んでいます。

新潟市児童生徒数	H.21　64,579 名　→　R.02　57,496 名	12 年間で 7,083 名減少
特別支援学級に在籍する児童生徒数	H.21　９１３名　→　R.02　2,061 名	12 年間で 1,148 名増加

もっと大局的に視ると，上記のとおりです。１２年間で全児童生徒数は０．８９倍となったのに対して，特別支援学級に在籍する児童生徒数は２．２６倍となっています。この変化は，新潟市が「障がいのある人もない人も共に生きるまちづくり条例」を平成２８年４月１日から施行し，全市を挙げて取り組んできた成果であると共に，新潟市教育委員会が学校教育の重点として定め，強力に推進してきた「自立と社会参加の力を育む特別支援教育の推進　インクルーシブ教育システム*の構築」が，着々と実現していることの現れであり，良い傾向だと捉えています。

かつては，特別支援学校に勤務する専門性の高い教師が担当していた「特別支援教育」は，もはや特別なものではなく，教職員全員が専門性を高めていかなければならないものに変わりました。私たち両川小学校教職員も，日々研修を深めながら，専門性を高める努力を続けています。

そんな流れの中にありながら，残念なのは特別支援教育に対する世間の認知がもうひとつ広まっていかないことです。『発達障害の子どもたち』（講談社現代新書 2007）を著した杉山登志郎医師も，そのような現状を以下のように憂いています。

＜幼児期の発達障害の子どもをもつ両親に多い意見＞
・発達障害は病気だから医療機関に行かないと治療はできない。
・なるべく早く集団に入れて普通の子どもと接するほうがよく発達する。
・幼児期から子どもの自主性を重んじることが子どもの発達をより促進する。

＜学校進学を控えた子どもを抱える家族に多い意見＞
・発達障害は一生治らないし，治療方法はない。
・発達障害児も普通の教育を受けるほうが幸福であり，また発達にも良い影響がある。
・通常の高校や大学に進学ができれば成人後の社会生活はより良好になる。

おのおのについて，皆さんはその是非をどのように思われただろうか？これらはすべて，私から見ると誤った見解か，条件つきでのみ正しい見解であって，一般的にはとても正しいとは言えない。（中略）／ゴールである「自立」とは何か？人として生まれた子どもが，受精した瞬間から社会の中で生き，自立するまでの過程全体が「発達」である。そう捉えると，発達障害のゴールは自立であることは疑いないだろう。では自立とはどのような形態か？私は，次の３つを自立の目標としている。

１．自分で生活できる　　２．人に迷惑をかけない　　３．人の役に立つ

子どもは発達をしてゆく存在であり，当然，発達障害の子どもたちも日々発達してゆく。その過程で，凸凹や失調は，全体として改善してゆくのが普通である。子どもの頃に発達障害をもっていたとしても，生活をしてゆく上で支障になるようなハンディキャップをもち続けているとは限らない。むしろ改善が，大多数の場合には実現可能である。／子どもを正常か異常かという二群分けをおこない，発達障害をもつ児童は異常と考えるのは完全な誤りである。発達障害とは，「個別の配慮を必要とするか否か」という判断において，個別の配慮をしたほうがより良い発達が期待できる，ということを意味したものである。

ＬＧＢＴＱという考え方に代表されるように，現代は多様性を認め合い，助け合う共生社会です。いや，共生社会を目指している現代です。自分の中に不当な差別意識があるのならば，これと向き合い，否定し，自分を変えていかなければなりません。誰にとっても生きやすい社会にするためには，一人一人の自覚と努力が不可欠です。

特別支援教育についても同様です。むかしむかしの「特殊学級」「養護学校」などという言葉や，その言葉に対するイメージは捨て去るべきです。差別や偏見をもたず，あるがままを受け入れ，その上で，一人一人の成長をどう促していくのか。その方法を教師と保護者で一緒に考え，実行していくのが「特別支援教育」なのです。

先日，特別支援教育担当職員が，子どもたちに「どうしてたんぽぽ学級があるのかな？」というお話をしました。すべてを再現するには紙幅が足りないので，印象的な言葉だけを羅列します。

・得意なことや苦手なことは，みんな一人一人違います。
・アイマスクをつけて走っている子をあなたは遅い！と言って怒りますか？
・たんぽぽのお友達も，みんなと同じように大人になって働いて立派に生きていけるように頑張っています。
・一人一人みんな違って当たり前です。みんな違うから楽しいのです。

子どもたちはみんな頷きながら，しっかりと話を聴いていました。こんな素直で優しい子どもたちと共に，両川小学校はこれからも特別支援教育を力強く推進していきます。

＊障害者権利条約によれば，インクルーシブ教育システムとは，人間の多様性の尊重等の強化，障害者が精神的及び身体的な機能等を最大限度まで発達させ，自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下，障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり，障害のある者が一般的な教育制度から排除されないこと，自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること，個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要とされている。平成１８年に国連で採択された「障害者の権利に関する条約」において初めて提唱された，新しい概念である。（文部科学省ＨＰより）